九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

異端と正統との反転図形：ディキンスンの超難解な263番の詩

原口，遼

https://doi.org/10.15017/2332557

出版情報：文學研究. 91, pp.1-21, 1994-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

異端と正統との反転図形

―ディキンスンの超難解な263番の詩―

原　口　　遼

［言及されない263番の詩］　前回、200～280番までの詩について翻訳した際、263番の詩に関しては難解という事で保留付きで翻訳文を掲げておいた[1]。今ここに、その詩を私がどのように解釈して読んだのかについて、その評釈（Explication）を提出しておきたい。ディキンスン詩が概して難解である由縁は恐らく次のような事情によるであろう。まず、①ディキンスン詩というものがそもそも詩人その人によって公刊されたものではなく、詩人の死後、手書きで小冊子に清書され残されていた原稿を基に、後年 Thomas Higginson, Mabel Loomis Todd、Thomas Johnson 等によって編集され、活字に組まれたものである事から、それらの詩が恐らくは完成品でなく、作成途上にあった可能性があり、そうした事情から詩の中に余分の曖昧さが残っているのではないかという事、次に、②詩人自身が詩の中に緊張や曖昧さや神秘性を生み出そうと試みて（一種モダニズム的な試みを行ない）、詩をわざと難解な形にしていた可能性がある事、そして、③上の②とほぼ同じ事になるが、曰く言いがたい観念を何とか表現しようと模索し、それらを短詩形の中に詰め込もうとして精一杯努力していた事、或いは表出と韜晦との間に一種の緊張関係がある事等々である。そうした事は本詩についても、当てはまる。

しかし本詩は現在では立派に活字で組まれて出版されているのであるし[2]、また近年の出版技術の進歩により、手書きの原稿そのものがフォートコピーされて、分厚い本の形を取って出版され、比較的容易に読む事ができるようになった事などから[3]、少なくともその伝えんとするメッセージは、その意味合いに曖

味さがあったならあったなりに、我々に捕捉できないわけではない。そういうわけで、この際、本詩の理解を自分なりに試み、それを明らかにしておくのである。なお念のため、文学方面で相当に学識のある幾人かの英米人の大学教官（とは云え、ディキンスン研究の専門家ではない）に当ってみたが、彼らは一様に首をひねり、頭をかかえ、お手上げの反応を示したので、ここは私なりの考えを提出するしかない。

無論、本詩に関するこれまでの議論、解釈、短評の類については、文献書誌を手掛かりに調査してみたが、意外な事に、英文の論文一つを除いては、本詩に関して言及した研究書、批評書、評釈本、評伝の類はほとんど皆無という事が分かった。わが国でも本詩に関する評釈、翻訳の類はこれまで出ていない。[4]

こうした事情から私の解釈も暫定的なものである。正直なところ、こうした文字通り頭痛を来たすような詩を読解する事にかかずらわる事の有意味性を、我ながら疑うところなきにしもあらずなのだが、ディキンスン自身は恐らく自分に訪れ来る霊感と自らの天才を信じて、選ばれたる詩人としての誇りを持って懸命に書き記したのだろうし、ディキンスン詩の場合、詩のテクストの中において意味上の一貫性（consistency）が必ず存在するというのが、これまでディキンスン詩を読んで来た私の信念である。さらには、いかなる詩人の詩であれ、テスクトそのもの解釈と鑑賞こそが、詩研究のアルファでありオメガであるべきである以上、私のささやかな評釈も研究の発展に何らかの貢献をするに違いないといった立場から、敢えて卑見を提出する次第である。元々が難解な詩篇であるゆえ、私なりの speculative reading が相当混じることは避けがたい。

まずは本詩（No.263）の拙訳と原詩とを掲げる。

［拙訳］神性を表象する大いなる魂と、
　　ベールのこちら側の
　　私自身の魂とを繋ぎ留めているのは、
　　わずかに肉体のひとひねり。

ひとたびその霞んだベールを眼にするや、
大いなる魂の名は、
私の魂から遠くと奪い去られる。
あたかも生前、何らの悲しみすら

優しくも厳粛な文字で刻印されたことがなかったかのように。
大いなる魂が私の視界から、
永遠へとひそやかに連れ去られたとき、
わが眼は振り返ってそれを見たのだ。

わが手は二本だから、私の魂を支えるのにはさらなる手がいる。
よって、危険に直面することに鑑み、
さらにまた新たなる鎖帷子で身を固めた勇気が与えられた、
即ち、胸を張って闊歩する巨大なる愛が。

巨大なる愛の包容力は神々が示しうる何物よりもはるかに大きく、
神々はと云えば、土に戻る人間の前でこそこそとして歩くのみ。
かくて神々の天国があれこれと誇示してみせるものにもかかわらず、
人間は思い出の形見たる私の魂のことを見捨てはしないのだ。

[原詩] A single Screw of Flesh
Is all that pins the Soul
That stands for Deity, to Mine,
Upon my side the Veil -

Once witnessed of the Gauze -
Its name is put away
As far from mine, as if no plight
Had printed yesterday,

In tender - solemn Alphabet,
My eyes just turned to see,
When it was smuggled by my sight
Into Eternity -

More Hands - to hold - These are but Two -
Once more new-mailed Nerve
Just granted, for the Peril's sake -
Some striding - Giant - Love -

So greater than the Gods can show,
They slink before the Clay,
That not for all their Heaven can boast
Will let its Keepsake - go

［評釈］　さて本詩を全体的に眺めて見た場合、最重要な観念は、第４連１．４の“Some striding - Giant - Love -”であろう。また第１連のll．２～３の“the Soul / That stands for Deity”と１．３の“to Mine（=My Soul)”との関係が問題となって来るだろう。また“Some striding - Giant - Love -”（「闊歩する巨大なる愛」）と第５連に見える“the Gods”（「神々」）とがいかなる関係にあるのかも問題となって来るであろう。

第１連から順次見て行く。“the Soul / That stands for Deity”（「神性を表象する魂」）と“Mine”（「私の魂」）とを「繋ぎ留めているのは、わずかに肉体のひとひねり」という意味は、「神性を表象する魂」と「私の魂」とは、「肉体」という極めて脆く危い存在の上で結び合っているので、例えば、「肉体」が危胎に瀕したり、消滅するような事でもあれば、いつ何時その両者が結び目をほぐされて別々の存在になるやも知れぬという事を言っているものと思われる。そしてそうした「神性を表わす魂（いわば、大いなる魂“the *Big*

Soul”)」と「私の魂」とは、「肉体」を媒介として、ベールの私の側（即ち、来世でなくこの現世の側）において結び合わされているのだ、といった解釈になる。“the Veil”（「ベール」）とは幽明の境に掛かっている幕の比喩だと私は解釈する。

この“the Soul / That stands for Deity”（「神性を表象する魂」）とは、持って回った言い回しであるが、それを“God”(「神」）とか“Godhead”（「神性」）などと言い切ってしまわないところに、本詩におけるディキンスンの思想と戦略があるようである。つまり、ディキンスンはここでは「私の魂」と「神」そのものとが直接結びついているのでなく、「私の魂」と「神性を表象する魂」が、（「肉体」において）繋がっている限りにおいて、「私の魂」はこの世に生かされているのだ、とするような考えをしているようだからである。

このようないわば「大いなる魂」の事を、当時影響力の大きかった高名なる哲学者 Emerson（1803−1882）云うところの“Oversoul”（「大霊」）と類似したものと解釈し、従って、ディキンスンはエマスンの影響を受けていると考える事は自然な事である。しかし、本詩の場合、それは天地自然に満ち満ちている自然の精気・精霊といった意味での汎神論的なエマスンの“Oversoul”の概念とは少しく違っていて、ディキンスンはその事をわざわざ説明的に「神性を表象するところの魂」（“the Soul / That stands for Deity”）と述べているので、彼女はその魂の事を、明確に宗教上の観念として捉え、（「神」そのものでなくとも）「神」の代替物として捉えている。そして、その「大いなる魂」と「わが魂」が合体しているときに、人は現世に生かれさているのだとされる。[5]

しかし、その「大いなる魂」が「肉体」を通じて「わが魂」に繋がるといった観念は、明らかにキリスト教の神観念とは違うものである。なぜなら、正統的なキリスト教の考えにおいては、そうした魂と人間の魂とは、キリストを通して、またはキリストの意思を体現した教会を通して、交流するとされている

からである。私は先程こうした持って回った表現を、ディキンスンの思想と戦略の然らしめるものと言ったが、今ここで結論を先回りして言っておくなら、そのような微妙な表現をしながら、ディキンスンはキリスト教の神にも、超絶主義の“Oversoul”の観念にも、一定の距離を置き、叛旗を翻しているものと、私は考えているのである。その事は本詩を全体的に読めばおいおい分かって来るのであるが、しかし、もちろん彼女はそうした時代のいわば“Master Narrative”に対する冒瀆的で反抗的な態度を、大っぴらに表現する事ができなかった。従って、本詩においては、韜晦と表出との間で緊張を妊まされて、詩のテクストの記述は難解なものになって来ているのだと思われる。

なお　本連の１．４の“the Veil”と第２連の１．１の“the Gauze”とは、同じものの言い換えと考えられる。“Upon my side the Veil”（「ベールの私の側」あるいは「私の側にベール」とは、「天国側ではなく、現世の側にて」という意味であろう。

次に第２連に移る。１．１“Once witnessed of the Gauze”を、文法的に省略されている語句（主語）を補って読むならば、“Once one witnesses the Gauze”（「ひとたび人が霞の掛かったベールを眼にするや（例えば死に直面するや）」）と能動的な意味になる。第２連１．２の“Its name”は文法的に“The Soul's name”である。従って、“Its name is put away”の意味は、「大いなる魂の名が取り去られる」、即ち「大いなる魂の存在を示すところの名、つまりはその魂そのものが取り去られる」となるであろう。“put away far from mine”（「私の魂（の名）から遠くへと取り去られる」）とは簡単に言うと、「私の魂から（大いなる魂が）どこか遠くへ飛び去って行ってしまう」という意味になる。“as if no plight / Had printed yesterday, / In tender - solemn Alphabet”とは「あたかも私の苦しい姿が、ほんの昨日までは優しい厳粛な言葉で刻印されてはいなかったかのように」と受け身（“had been printed”）の意味となる。“plight”とはキリスト教的な考えによるなら「人

間の堕罪による哀れな様子」という意味になるが、この場合は、ヨリ一般的に、現世での愛憎による苦しみ、その他もろもろの苦悩といった意味に取れる。ひとたび「大いなる魂」が「私の魂」より飛び去ると、そうした現世での苦しみやしがらみ等の何もかもが嘘のように消し去られてしまう。（しかしそれでは、これまでの人間的な経験 ── 喜怒哀楽、愛別離苦、幸不幸 ── も余りにも虚しいのではないだろうかといったinsiunationがある。）“solemn”とは体験というものの厳粛さを示し、“tender”とは苦しみですらも、過去のものとなり思い出となればいとおしく感じられるのであるからそのように形容されるであろう。また“Alphabet”とは、比喩的表現で、「記録」とか「言葉」とかいう意味に解される。こうした抽象名詞を具象名詞で表現するのはディキンスン詩の常套であるが、“Alphabet”は「言葉」や「記録」とわざわざ意訳しなくとも、「アルファベット」はともかく、「文字」と訳しても意味は伝わるので、原詩にヨリ忠実にそのように訳した。

本連の意味は簡単に言うと、「大いなる魂」の去り方はいかにもあっけなく、私の生前の苦しみも、優しくも厳粛な記録として刻まれたその形跡すら残さないのであろうか、それでは、それまでの人間的な経験・体験・記憶・想い出などの意味が雲散霧消して、あまりに虚しいではないか、と云った意味になる。

第３連に移る。１．３の“it was smuggled”の“it”が何かは分かり難いが、文法と意味上の流れからして、“the Soul / That stands for Deity”（第１連に見える）、即ち「大いなる魂」を指すはずである。そして、ll. ２～４の訳は「私の眼が振り向いて見たとき、大いなる魂が私の眼の前を通って、永遠へと、こっそり運ばれたのだ」となる。恐らく、このあたりのアイデアは、私は眼の前で、「わが魂」から「大いなる魂」が取り去られ、永遠へと運ばれて行ったのを目撃したという事を言っている。そうなると、「大いなる魂」を奪われてしまった「わが魂」は、恐らくいわば茫然自失して、進退極まってしまうはずである。なぜなら、そもそもそれまで「わが魂」に生命を吹き込み、

生命を生かしてくれていた、いわばその原動力となっていたもの（「大いなる魂」）が、今や飛んで行ってしまったのであるから。第１連ll.１～３の比喩を使って言い換えるとすれば、今や「肉体のひとひねり」（１.１）によって「ピンで繋ぎ留めていた」そのピンがはずされて、「大いなる魂」が「わが魂」から運び去られて行ってしまったわけだから。

続いて第４連に移る。そうした茫然として一人ぽっちの「私の魂」を支えるのには、生身の人間たる私の所有する（ヨリ厳密には「私の所有した」となろうか）二本の手では無理であり、それ以上の手（助け手）が必要なのだ、となる。かくして「私が危険に直面する場合に鑑み、またもや新たに鎖帷子で固められた神経（＝勇気）が授けられたが」(ll.２～３)、それは「堂々と闊歩する巨大なる愛（“Some striding - Giant - Love -”）だった」（１.４)。「またもや」（“Once more”）とは、恐らく本詩のspeakerは、これまでにもこうした死に類した体験、危機的な体験を何度か経験しているからであろう。「大股で闊歩する愛」とはあまりにも具象的で、ある意味では子供らしい比喩、童話的な比喩とも感じられるが、抽象名詞を具体名詞のヴィヴィッドなイメージで捉えるのは、Allen Tateなどが指摘しているようにディキンスン詩では極く普通の事である。[6] 因みに、ここの「(愛が）大股で闊歩する」（“striding”）という動作が、第５連１.２の「(神々が）こそこそと歩く」（“slink”）という動作と対比され、愛の持つ力が大いに頼りとされている事はいうまでもない。

第５連は難しい。第５連全体の意味をまず先に取っておくと、この「巨大なる愛」(前連１.４）は「神々が指し示す事ができる力よりもはるかに大きい」（“so greater than the Gods can show”)。それに較べると、「神々などは」（“They”）「塵に戻って行く人間というものを前にしては」（“before the Clay”)、救済の手を差し伸べる度量も力も持ち合わせず、「ただこそこそとして歩くのみである」（“slink”)。また「そうした神々の天国が自慢してみせ

るあらゆる幸福、安楽等にもかかわらず」(“for all their Heaven can boast”)、「人間というもの」(“the Clay”) は、死出の旅路の入口に臨んだ今日まで慈しみ愛し続けて来た「その形見」(“its keepsake”) を「打ち捨てはしないのだ」(“will *not* let～go”) ...と。

本連は文法的に相当に破格な構文を使いながら、ディキンスンは一種独特の思想を何とか言おうとしているので、曖昧かつ神秘的な主張となっている。そこでまず文法を押さえてみよう。1.1の“greater”の主語はその直上の第4連1.4の“Giant - Love”である。「(巨大なる愛の方が) ヨリ大きい」として比較されている相手方は“Gods can show”だが、ここは“*what* Gods can show”と関係代名詞の“what”を補って読み、「巨大なる愛」の力の方が「神々が示しうるもの (例えば、安楽、愉楽)」よりもはるかに偉大だとなる。1.2の“They”は関係代名詞主格の“who”と同じ機能を果たしているので、従って“*They* slink”とは“Gods slink”という事だが、「神々がこそこそと歩く」と云うのは、神々をいかにも卑小に扱っており、イメージとしては独特で面白いが、 相当に冒瀆的な表現であると言える。 この“Gods” (「神々」) がどういう神々なのか、とは問題になるところであろう。考え方によっては、複数形である事から「(キリスト教の唯一神に対して) 異教徒達の神々」と考える事もできようが、私は、キリスト教の神も含め、諸々の神々の事を、「神々」と言っているものと取る。「神々」が「こそこそ歩く」(“slink”) などという言い方には、神々が、人間たちと同様愛憎を持ち、嫉妬し、争闘したギリシアやローマのそれらのような性格を与えられている様だが、私は、当時の時代思潮や、ディキンスンの書簡などに見られる言動や思想などからして、神々をギリシア、ローマのそれに限定しなくとも、キリスト教の神も含めてよいと考える。ディキンスンが正統的キリスト教の教義に反抗し続けた事はむしろスキャンダル的に有名だが、ここでもディキンスンは、「神々がこそこそと歩く、尻尾を巻く」と表現しているので、ある意味では随分と思い切った事を言ってのけているわけだ。

1．2の“before the Clay”の“the Clay”とは、「そもそも土から造られ土に戻って行く人間というもの」の意味であろうし、“They slink before the Clay”とは全体的な流れからして「神々は（大いなる魂が飛び去ってしまい、今や孤独の魂をうちに持つ）人間を前にして、こそこそと歩いているだけである（人間の魂が救済を求めて手を差し伸べても助けにもならないのだ）」となろう。

1．3の冒頭の“That”は“the Clay”を先行詞とする関係代名詞の主格である。“for all their Heaven can boast”は、“for all”が“in spite of”という意味なので、「神々の天国が自慢するもの（例えば悦楽、安楽）にもかかわらず」となる。その直前の否定辞の“not”は難しいが、これはディキンスン詩によく見られる、シンタックスを無視した否定辞の変則的な置き方である。そしてこの場合は次行（1．4）全体の意味を打ち消すので、“Will its Keepsake - go”は“Will *not* let its Keepsake - go”と読む。この“not“の係り方一つにしてもこのように読むのだと把握できる者は、相当な英語の使い手か、ディキンスン詩の文体上の癖について相当に訓練を積んだ者である。逆に言うと、この程度の難しさの英語が分からないと、ディキンスン研究はにっちもさっちも行かないという事になるが、厄介な事に、ディキンスン詩は、そうした事例に事欠かないのである。

1．4の最後の語の“go”は、同じ行の“let”と組んで熟語をなしているので、“let～go”で「往かせる」「落とさせる」「見捨てる」「忘れ去る」の意味になる。“its Keepsake”の“Keepsake”とは「形見」というほどの意味だが、さて“its”とは何の所有格なのであろうか。この候補となる単数名詞としては、これまでに現われた中から、“The Soul”（第1連1．2），“Mine=My Soul”（第1連1．3），“Giant - Love,”（第4連1．4），それに“Clay”（第5連1．2）等が考えられる。まず“The Soul”（「大いなる魂」）だが、「大いなる魂」は私の見ている眼の前から、永遠へとこっそりと運びさられた（第3連ll．3～4）のであるから、もはや今ここに存在もしないものが、何かを、例

えば「形見」をいまさら「見捨てる」などとは意味をなさない。また「私の魂」（“My Soul=Mine”）については、「魂」は精神的な存在で、それが主体として何かを持つ事ができるのかどうか言及されていないし、また不明である。さらに「私の魂」は、はるか前方の第１連１．３に現われており、「その」（“its”）としていまさら指し直すには遠すぎる。かくして“the Clay”が残るが、“the Clay”（＝“That,”本連１．３）と考えた場合、「人間というもの」はこの世での「形見」を忘れない、となり、“its”の直近の前方にある事もあり、“its”を“Clay’s”と取る事が最も自然だという事になる．．．。そんな事は文法的に初めから明らかではないか、という反論（もしくは反感）をお持ちの向きもあろうが、まず、所有格“its”の主体になりうる“That”（１．３）の先行詞の“the Clay”とは一体どういう意味なのかという問題があるし、そもそもまず“Keepsake”とは一体どういうものなのか、次いでどういう物が“Keepsake”（「形見」）になりうるのかという疑問もあるし、ひょっとしたら辞書を引いて“Keepsake”そのものの定義を確認すると云った作業をし直す必要が生じるかも知れず、事はさほどに単純ではないのである。従って、慎重を期すためにも、本詩全体を見回して、可能性のある候補となる語を挙げた後、しらみつぶしに洗って行ったわけである。

［人間のこの世の形見、とは］　さて、今度は問題となる「人間の形見」（“its keepsake”）となる物とは何かを考えてみよう。その可能性としては３つあろう。

その１つは、第４連１．４へ戻って、「巨大なる愛」がそれである。その場合の意味としては、「神々」が天国の幸福、安寧などを自慢してみせるが、ディキンスンとしてはそれを信用できないので、むしろ現世での「思い出の形見」たる「巨大なる愛」を忘れ去りはしないという事になる。こう取ると一見して意味は通じるみたいだが、しかしそもそも「巨大なる愛」は「新たに鎖帷子で武装した勇気（を持たせるもの）」（“new-mailed Nerve，第４連１．３）とし

て、一人ぽっちになった魂を救い出すためのいわば援軍として「派遣されて来た」(mailedにはsentとenarmoredの両義があり、掛言葉と考えられる)のであるから、その「巨大なる愛」の助けを得て「人間」(“the Clay”)は何かをする事が求められているのであって、新たにやって来た援軍たる「巨大な愛」の事を忘れはしない、というのは、実は意味的におかしいのである。そしてまた、この様にして本詩が終えられた場合、“*Big* Soul”(=it)を取り去られ、一人ぽっちで残された「私の魂」(第3連ll. 3～4)は、その後どうなったのだという疑問が読者の側に残り、詩はまだ終わっていない事になる。

第2の解釈としては、土からできている存在としての人間が、捨て去りはしない形見とは“Flesh”(第1連1.1)を指すのではないかとも取れる。しかし、そもそも“the Clay”(「土からできている存在」)と“the Flesh”(「肉、肉体」)とは、同じものの異名であるから、その点から無理である。また強引にその様にして解してみようとすると、その場合は、“the Clay”が、「大いなる魂」が抜けた後の「肉体」(“Flesh”)をいつまでも抱いているようで、一種“necrophilia”のような感じになり、薄気味悪い。

第3の解釈として、“the Clay”は“My Soul”を「現世の形見として」見捨てはしないと取る場合、「人間」は「大いなる魂」が飛び去ってしまいひとりぽっちなった「その自己の(=私の)魂」の事を見捨てはしないとなる。

この場合、若干問題になるのは、“the Clay”が、“My Soul”(そもそも“My Soul”とは第1連1.3に“Mine”としてしか現われて来ないのだが)をその形見として見捨てはしないという場合、主体が“I”でなく、“the Clay”なのが引っ掛かる。(それならば、“*My* Soul”でなく、“*its* Soul”となるべきであろうから。)しかしそれは、本詩のspeakerが見ている角度の違いによって生じた呼び方の違いと考えられて、一般的な人間を呼ぶ場合の“the Clay”は、詩の進行に従って、本詩のspeakerから見て、そうした「人間たる私」という具合に、一般的な意味から個人的な意味へと、その意味内容が若干ねじれて来たためとみなされる。そしてその場合、そうした「私の魂」

を支えてくれるのは「闊歩する巨大なる愛」なのだという事になる。即ち、結論としては、“its(=Clay's) Keepsake”とは“My Soul”という事になる。

[「巨大な愛」の哲学]　かくして、この評釈の冒頭で予告したように、本詩のキーワードで最重要の観念は、第４連1.4の“some striding - Giant - Love”であるという事が分かり、ディキンスンは本詩においても、またもや反キリスト教的な立場を明らかにすると同時に、いかにも女性らしい感覚と信念から、彼女独特の愛の哲学を主張し披露しているのだと考えられる。そうした彼女が、大事にする愛とは一体何かについては、ディキンスンの詩業全体に関わる大問題なので、それについては、また別稿を起こす必要がある。今回は、ディキンスンが、現世の体験とその想い出をこそ大事にして、それらを見捨てず、記憶にしっかりと刻んで、「大いなる魂」が飛び去ってしまった後の、孤独なる「わが魂」を支え慰めてくれるのは、「愛の力」であって、それは、死後のあの世での、幸福や安寧よりも、実態を備えていてヨリいとおしい、という思いを開陳しているものとまとめておきたい。そして、これはある意味では、宗教的ないわば涅槃に至る道をも、不要としているのであるから、(仮に本詩が公刊されていた場合) 正統的キリスト教の立場としては、冒瀆的な、人間中心主義の主張と見られてしまっても致し方がなかったであろう。

[正統的キリスト教に則した読み方]　ところで、本詩は正統的キリスト教の教義に関して、上述の解釈とは180度反対の意味に読む事も不可能というわけではない。即ち、正統的なキリスト教の教義を唱道し、異教的な神々の観念を排撃したものとして読み解く解釈も不可能ではないのである。その場合は、第５連１．１の複数形の“Gods”の事を、一神教のキリスト教の神と区別する意味から「異教徒の神々」と取り、“their Heaven”も「異教徒の神々の天国」と取り、これに対応して、“Some striding - Giant - Love”(第４連１．４)を、「キリスト教の愛（アガペー)」と取る。そしてその後の解釈も、人間は

この世の忘れ形見の「私の魂」の事を、キリストの愛を支えにして、決して捨て去るような事はしない……と解釈する事で意味を一貫させるのである。さらにまた、本詩そのものがきわめて曖昧で錯綜している事から、読み手によっては、「人間が見捨てはしない形見」(“its Keepsake,”第4連1．4）の事を「キリストの愛」(“Giant - Love”）と取るような事も十分やりかねないので、本詩はキリストの力強い愛の力を唱道する詩であると解釈する者も出て来るであろう。ただそうした正統的キリスト教の教義に即した解釈を取る場合、本詩のspeakerは、終始一貫してキリストの愛を支えにして生き、異教徒とその神々を峻拒するというのであるから、厳格かつ敬虔この上もないキリスト教徒でなければならなくなる。（例えば、ディキンスンが頑固に反抗して、結局そこを退学させられる羽目になったMount Holyoke Seminaryの修道院の院長のMary Lyon女史のように。）

またそうした解釈の場合、第2連1．3の“plight”なども、本来的に罪に落ちている存在たる人間の「苦境」となり、現世でのあらゆる人間の行為は聖書にあらかじめ書かれているという意味から、“in tender - solemn Alphabet”（「優しく厳粛なるアルファベット」）（第3連1．1）も文字通り「聖書」を指す。そうなると“the Soul/ That stands for Deity”も、別段超絶主義の“Oversoul”の類と取る必要すらなくなるので、「神性を表象する魂」とは文字通りキリスト教的な意味での「精霊」の類と取ってもよいのであるから、本詩はキリスト教の教義を唱道しこそすれ、それから何ら逸脱していない詩だと解釈する事もできなくはない。つまり本詩は、正統的キリスト教の教義を、心底から信じ込んだ敬虔で熱烈なキリスト者の神の愛への信仰告白の詩とも取れなくもないわけである。

［二重写しの反転図形］　だがまた他方で、前述したように（そうしたキリスト教の神も含めて）やおよろずの神々が保証してくれる天国での安寧、幸福、悦楽などは信用もせず望みもせず、「私（＝本詩のspeaker)」はこの人生に

おける人間的な愛というものを信じ、それを支えとして、「私の魂」に刻み込まれた生前の記憶や想い出を大事にしつつ生き、また死んでも行くのだとする、人間の愛を以て宗教に置き換えるような意味での、反宗教的な詩だとも取れて、本詩はいわば二重映しの意味を妊んだ詩として受け取られるのである。

つまり、この詩は、一種の炙りだしの形になっており、一方で、正統的なキリスト教の教理を熱心に唱道している詩のように読めるが、逆にそうしたキリスト教の教義に対して力一杯に反抗し、彼女なりの「人間的な愛の宗教」を唱道している詩としても読めて来る。それで、今度はそのような「愛の宗教」を主張したものとして読み出すと、その反対の意味が見えて来る、といった形になっているのである。それは、心理学でいう「図」と「地」が視線の置き方によって反転して来る、反転図形の様なものにもたとえられよう。「愛」と言っても、“Giant - Love”が、「人間的な此岸の愛」と「キリスト教的な彼岸の神の愛」の両様に読めるような具合に記されてあるところに、ディキンスンの悪戯心としたたかさがあると私は解釈するのである。

本詩はディキンスンの他のほとんど全ての詩同様、もちろん、生前には出版されなかったが、たとえ出版されていたとしても、両用に取られる余地があったと思われる。（そもそも本詩が一般の読者から正確に読み解かれたかどうか疑問だが。）舌を頬の内側に入れての表現で、つまりは自らの詩行に危険な思想をも忍ばようとしたために、あるいは真意をさとられないようにとの韜晦により、本詩は文法的にも意味的にも、曖昧で難解、かつ神秘的になって行った部分があるのではないかと、そのように私は考えている。

しかし、そのように両様に読めてしまう曖昧さにおいて、19世紀中期のいわゆる「信仰復活運動」（“Revivalism”）が猖獗をきわめていた時代において、当時最も保守的で、一枚岩的な教義を人々に強制したピューリタニズムの教義としきたりの牙城の様な様相を呈していた、コネティカット渓谷のディキンスンの住んだアマーストの町では、十分に反キリスト教的だったのではないだろうか。

まことに、もしこの詩の裏の意味、つまりディキンスンの真意がそのままに伝わり、本詩が公刊されていたならば、家族の中でもただ一人教会にも属さず、果樹園を教会堂に、ボボリンク鳥を寺男にみたてて、神と直接に交流し、自己流の「愛と自然の宗教」を唱道し続けたディキンスンは、いみじくもAllen Tateが言ってのけたように、17、18世紀の厳格なるピューリタンのCotton Matherならば、「魔女」として火あぶりの刑に処した事であろう[7]。ディキンスンが、生前詩を出版しなかった理由には、一つには、よく言われるように、出版を売名行為として嫌悪する気持ちがあったと同時に、もう一つには、彼女の詩の中には、このような異端的で危険な思想が含まれている詩が少なくなかったからであろう。まことにディキンスンとは、孤独にして厳しい人間であったと同時に、人間的愛の重要性をも十分に認識し、またそれを求め続けてもいた、熱い心の持ち主であったと思われる。

ディキンスンは、自己の直感と信念以外に従うことなく、頑固に我が主義に忠誠を尽くしていたのであり、キリスト教の神や教会制度などに反抗し続け、そのように反抗する事で思索を深め、詩作のうちに成長していった詩人だった。彼女がそうした自己を守るために取り上げた武器は、孤独、自然との愛、高踏的生活、揶揄、韜晦、および狡猾であった。それは教会にも、国家にも忠誠を誓わず、恐らく家庭の中でも真の心を通わす者とてもなかった、まことに孤独なるファウスト的な魂を持てる者の、たった一人だけの、しかし、いかにも女性らしい反乱であったのだ。

しかし、彼女の詩が持つ、極めて理知的な反骨精神と同時に、本来的な温かさ、優しさは、彼女が一方で筋金入りの思索の人でありながら、女として、人間らしさを唱え続け、その主張と思想が一つの積極的な行動の哲学として確固として成立していたからであろう。そのような事を行間に表現している重要な詩として、私は本詩に注目し、本詩の重要性を指摘するのである。

かくて、拙論の読者には、本詩の解読への参加へをお誘いするわけだが、ディキンスン詩は本詩に限らずその英語の語彙も、その文法も、神秘的な思想とい

う点からも、その理解にはなかなかに困難が伴う。かくして、捕捉せられざるディキンスンは、ベールの彼方、恐らくは天国の少しこちら側から、謎の微笑を永遠に投げ掛ける事ができるのである。

註

1 『九大英文学』第36号　九州大学英語学・英文学研究会　1993.11, pp.33−56.

2 底本としてはThomas Johnson, *The Poems of Emily Dickinson* (Belknap Press of Harvard U. Press, 1955) を使用した。

3 R.W. Franklin,ed., *The Manuscript Books of Emily Dickinson* (The Belknap Press of Harvard University Press, 1981) が2巻本で出た。

4 Sheila Clendenning, *Emily Dickinson, A Bibliography:1850-1966,* The Kent State University Press, 1968; Karen Dandurand, *Dickinson Schoarship, An Annotated Bibliography: 1969-1985,* Garland Publishing, Inc., 1988; 大本剛士編『日本におけるエミリディキンソン書誌 (1927-1985)』専修大学出版局 1986年等。

その後、書誌ではなく、個々の研究書に当たっているうちに、言及のある本にぶつかった。それは、William Shurr, *The Marriage of Emily Dickinson* (Lexington: The University Press of Kentucky, 1983), pp.176-177である。そこでは本詩のことを“an exceedingly troubled and difficult poem”と呼んでいる。しかし、詩の内容についての議論は相当に大雑把であり、本詩についても、誰か近親者（赤子）が死んで天に召された事を示している、などと牽強付会の説をなしている。その根拠となるのが、本詩1．1の“Screw”と云う語であるそうで、その語のディキンスンの時代の用法がひとくさり述べられた後、そのような慌ただしい結論となるのであるから、信用するに足りない。参考までにそのまま記しておくが、それはShurr自身が、述懐しているように、本詩が英米人にとってもまさに“an exceedingly troubled and difficult poem”である事を如実に示している

The most troublesome word in the poem is “Screw” in the first line, until one remembers that in Dickinson's time, in common household use, the word meant a small package. On (*Sic*) would buy a “screw” of tobacco or spices, for example, the purchase rolled in a loose sheet of paper with the ends twisted. Dickinson's poem, then, memorializes a small human being, intimately connecting her and the “thee” of the fascicles,taken out of this world before its time. (William Shurr, *The Marriage of Emily Dickinson* [Lexington: The University Press of Kentucky, 1983], p.176-177.)

5 日本における死後の「魂」の場合、「魂」は「肉体」より抜け出して天国に行き、「肉体」は藻抜けの殻になるとするような、「魂」と「肉体」の二元論があるように思われる。それに対して、本詩では「大いなる魂」の他に「わが魂」があって、この両者は「肉体」の上で合体しており、死ぬ瞬間に、両者はいわば離体するもの

と考えられているのが面白い。つまり、死後において「わが魂」は、恐らく途方にくれながらそのままそこに据え置かれるのである（恐らく「最後の審判」の日まで）。かくして、その孤独なる「魂」を誰が導いてくれるのか、誰がサポートしてくれるのかが、本詩の後半になって問題になって来るのだと思われる。

6 「ディキンスンは、これらの（死および永遠）観念を具象的に見ることができ、また種々に感覚されたものを抽象化し思考することができる。」(p.100.)「ディキンスンはただそれ（世界）を眺めた。そうしてその世界の中にあらわな「思想」が彼女の心に浮かび上がり、彼女の直接的な知覚の中に凝集した。」(p.106.) 新倉俊一『エミリ・ディキンソン ── 研究と詩抄』篠崎書林 1967。

因みに、このような具体的でヴィヴィドな比喩はHenry Vaughan (1621-1695) のそれを思わせる。"I saw Eternity the other night / Like a great ring of pure and endless light, / All calm as it was bright" *Cf.* "The World" in Henry Vaughan, *The Complete Poetry of Henry Vaughan* (Doubleday, 1964), p.231.

しかし、川崎寿彦氏も引用しているように、ある批評家は「ヴォーンの詩に自然そのものの観察と呼べる部分が殆ど皆無である」と指摘しているそうだが、確かにそのようにヴォーンの詩が感じられるからには、客観的なありのままの自然の観察とその描写を志した様に思われるディキンスン詩との違いは歴然として来て、そこがディキンスン詩の一つの特徴と魅力をなしているであろう。川崎寿彦「ヘンリー・ヴォーンの自然神秘主義」ピーター・ミルワード・石井正之助監修『形而上詩と瞑想詩』荒竹出版 p.189の引用(No.17)参照。

7 アレン・テイト「エミリ・ディキンソン論」新倉俊一著『エミリ・ディキンソン ── 研究と詩抄』篠崎書林 1967 p.111。

付　録

本詩に関してディキンスンの幾つかの書誌によって、私が捜し得た二つのコメントを参考のために記しておく。

まずAmy Horiuchi氏は、恐らくRosenbaum編の*A Concordance of the Poems of Emily Dickinson*を利用してであろうが、"gods"と云う複数形で現われるディキンスン詩を幾つか取り上げ、主として正統的キリスト教の神の観念（"God"ないしは"Godhead"）と「異教徒の神々」("pagan gods") とを対照しながら、その意味合いを点検している。263番の本詩（の一部）もそうした脈絡で取り上げられている。

*

(Datum 4) No.263

So greater than the Gods can show,

They slink before the Clay,
That not for all their Heaven can boast
Will let its keepsake - go　　c 1861

The words 'Gods' and 'Clay' seem to hint of clay gods, clay gods being of no spiritual use, but she probably is confessing that no matter if it is buried in clay, nothing can persuade her to let go of the earthly love that has engraved itself so deeply on her soul, or rather it may be taken the other way around, ie., the ascended love will not let go of her. Just as Pearl Buck in her childhoood prayed seriously and fervently to all the gods she knew, both Chinese and Christian, so Emily Dickinson must have invoked all the possible gods to which she would have liked to cling to, though she knew they were powerless to comfort her in times of trial.

(Amy Horiuchi, "Emily Dickinson's 'Gods' in the Plurality," in *Higginson Journal of Poetry*, No.8 [June, 1974], p.15.)

*

この短文だけでは意味が取りにくい向きに、この文章へのコメントを記しておく。引用されているのは第5連であるが、まずこの論旨でおかしいのは、本連の1.1に"Gods"、そして1.2に"the Clay"と云う語が見える事から、その両語から短絡的に"clay gods"と云う概念を引き出し、"clay gods"は精神的な助けにならないと言っている事である。("clay gods"とは"idol gods"の事で土で造った偶像の意。)私の解釈では"clay"とは「神々」どころか、上の評釈で示した通り「土から出来ている人間」の事を指している。つまり"gods"と"the clay"とは対極的な別物であるのだから、その両者を結び付けて"clay gods"とする事は、早我点である。この重要な部分で、意味の取り違えが起これば、後の解釈はほとんど全部違って来る。

また「パール・バックのようにあらゆる神々に縋ろうとした」("all the possible gods to which she [Emily Dickinson] would have liked to cling to")だが、本詩では、そうした「神々はこそこそ歩いていて」助けにもならないので、「堂々と胸を張って闊歩する愛」こそが私を支える、と言っているのであるから、ディキンスンはそうした尻尾を

巻いているような「神々」を呼び出してそれに縋ろうと云うのではなく、逆にそうした「神々」の事を、蔑み哀れんでいるのであるから、この一文もpointlessである。

☆

もう一つのコメントは、加藤菊夫氏のもので、加藤氏は次の様に記している。

＊

……彼女は愛を失った悲しみ、友を失った悲しみには耐え得たであろうが、自分の肉体の死の悲しみには耐え得なかった。なぜなら彼女は "When it was smuggled by my sight / Into Eternity - / More Hands — to hold - These are but Two - / One more new—mailed Nerve / Just granted, for the Peril's sake -"(No.263)「肉体が私の目の傍を永遠の中へとひそかに持ち去られる。押さえるもっと多くの手が欲しい。私のは二本にすぎない。新しい鎧を来た神経を危険にそなえて与えてほしい」と言っているからである。

(加藤菊夫『エミリィ・ディキンスン研究』研友社　1976 p.82)

＊

氏の解釈では、"it was smuggled" の "it" は「肉体」と云う事になっており、私の解釈の「偉大なる魂」("the Soul / that stands for Deity") とは、まったく別物である。その上で「愛を失った悲しみ、友を失った悲しみには耐え得たが、自分の肉体の死の悲しみには耐え得なかった」とまとめられる。「肉体がひそかに持ち去られる」などといった死体泥棒みたいな感覚も頂けないが、「愛を失った悲しみ、友を失った悲しみには耐え得たが、自分の肉体の死の悲しみには耐え得なかった」などとは、詩人ディキンスンがいかにも鈍感なエゴイズムの持ち主のように感じられて、ナンセンスな記述である。その証例とされているのが、詩からの読み間違いによる引用ともなれば、まったく無意味な文章となる。

かようにして、ディキンスン詩はその道の専門家が読んでも難しく、あちこちで解釈上の穴ぼこに落ち込む危険性がおびただしいという事が分かる。ただそれのみにとどまらず、日本人研究者の場合、ディキンスン詩はその読解において、読解者の英語力の程度が如実に知られてしまうので、それらは面白い見物(みもの)あるいは見せ物になってしまうので、ディキ

ンスンの難解詩の評釈という領域は、研究者にとっては危険を伴う猟場となっているようである。それはまことに「天使も踏むを恐れる所」なのだ。無論すべてのディキンスン詩がそうだと云うのではない。既に、地ならしの十分できている、安心して周辺の風景も見晴らせる大通りや場所も数多い。しかし、未到の原野も今なお奥深く広がっているのである。従って、私もまた不用意に足を踏み入れる「愚者」でないことを祈るのみである。